様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５３０

研究課題名（和文）両大戦間期フランスにおけるジャポニザンの活動

研究課題名（英文）The Activities of French Japanologists during the Interwar Period

研究代表者
渋谷　豊（Shibuya, Yutaka）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：７０３８６５８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：日仏文化交流史の研究の一環として、本研究では両次大戦間期のフランスにおける日本文学受容を取り上げ、同時代のジャポニザン（日本学研究者）の活動を検討した。特にアルフレッド・スムラーとルネ・モーブランに着目し、前者が日本近代文学（火野葦平の作品等）の、後者が日本の伝統的詩歌（俳句等）の受容に重要な役割を果たしたことを明らかにした。その際、彼らの仕事とフランスの文学的潮流との接点を探ることを重視した。主な成果としては、フランスにおける俳句の普及と「モダンな古典主義」の関係を解明した拙論「白い羊と俳句－フランスにおける日本文学受容の一側面」（『信州大学人文科学論集』第五号）等がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、１）日仏の比較文学研究において従来、研究が手薄だったフランス人ジャポニザンの活動を扱っていること、２）しかも、取り上げたのがこれまで完全に看過されてきた事象（スムラーによる火野葦平紹介、モーブランと文芸誌「白い羊」の関係）であったこと、３）文学受容の研究において困難とされる＜相手国（日本文学を受容する国）側に関する調査＞を広範に行ったこと、にある。これにより比較文学研究に寄与することは無論のこと、日本文学研究、フランス文学研究、翻訳学、異文化コミュニケーション論など周辺の学問領域にも波及効果を及ぼし得るものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study contributes to research on the history of Japanese-French cultural exchange by discussing the reception of Japanese literature in France during the interwar period and examining the work of Japanologists (researchers of Japan). I focused on Alfred Smoular and René Maublanc, and identified that Smoular played a crucial role in the reception of modern Japanese literature (e.g., works by Ashihei Hino), and Maublanc did likewise in the reception of traditional Japanese poetry (e.g., haiku). During this process, I investigated the link between their work and the literary trends of France. One important result of this is my publication of “White Sheep and Haiku: An Aspect of the Reception of Japanese Literature in France” (Shinshu Studies in Humanities , no. 5), which elucidates the relationship between the spread of haiku in France and modern classicism.

研究分野：比較文学

キーワード：日仏比較文学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は 2003 年にパリ第四大学で審査を受けた博士論文 La Réception de Rimbaud au Japon, 1907-1956 以来、フランス文学をもっぱら日仏比較の観点から研究しており、近年は特に日本文学がフランス文学に与えた影響を明らかにしようとしていた。

より具体的に言えば、両大戦間期を当面の研究対象とした上で、当時の在仏日本人が行った日本文学紹介のための出版活動に着目し、その実態の意義を解明しつつあった。この研究の最初のまとまった成果は、ジャーナリストの松尾邦之助を中心とする日本人グループが 1920 年代にパリで刊行した仏語雑誌『日佛評論 Revue franco-nipponne』に関する論考である。（渋谷豊「日佛評論について」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第 41 号。加筆修正の上、松尾邦之助『巴里物語』［2010 復刻版］社会評論社、2010 年　の巻末に「資料論文」として掲載。）

また、平成 24 年度～26 年度の科学研究費助成事業「『フランス・ジャポン』研究―大戦前夜の在仏邦人の出版活動」（基盤研究 C、研究代表者）もこの一環に位置づけられる研究であり、そこでは『日佛評論』の後継誌とも呼ぶべき仏語雑誌『フランス・ジャポン France-Japon』を研究対象とし、両大戦間期のフランスにおける日本文学受容の実態を探った。

こうした研究を進める過程で明らかになってきたのは、『日佛評論』誌や『フランス・ジャポン』誌に参加したフランス人執筆者、即ち「ジャポニザン」たちの重要性である。実際、フランスの知的土壌に日本文学を根づかせた彼らの功績は大きく、＜日本文学を発信する日本人＞と＜それを受けとめるフランス人読者＞という二項からなる図式では、当時のフランスにおける日本文学受容の実態には迫れない。本研究はこのような認識に基づいて着想されたものである。

なお、当該分野の国内外の研究動向を振り返っておくならば、従来、「日本におけるフランス文学受容」の研究に比べて、「フランスにおける日本文学受容」の研究は手薄であった。だが、日本と西洋の文学的関係を正しく評価するためには＜日本文学が西洋から一方的に影響を被った＞とする従来の見方を訂正する必要があり、また、フランス文学の実態を正しく評価するためには、フランス文学が非西洋圏から受けた影響を考慮する必要がある、という認識が広く共有されるようになってきていた。それにつれて、近年、「フランスにおける日本文学受容」の研究も活発になってきていた。本研究も研究界のこうした動向を踏まえて構想された。

ただし、フランスのジャポニザンに焦点を合せた研究は依然として手薄であり、俳句の紹介者として知られるポール＝ルイ・クーシューに関するモノグラフィーがいくつか存在することなどを希少な例外として、ほぼ未開拓の領域であったと言ってよい。その点に着目したのが本研究であったと言うことができる。

２．研究の目的

本研究の目的は、従来、フランス文学研究においても日本文学研究においても見過ごされがちであったフランス人ジャポニザンの著作とその関連資料を調査・分析し、彼らの仕事とフランスの文学界の動向との関わりを探ること、それによってフランスにおける日本文学受容の意義を明らかにすることにあった。

対象とする時期は、フランスにおける本格的な日本学の「黎明期」にあたる両次大戦間期に絞ることとした。

当初はジャポニザンとして特にルネ・モーブランとセルゲイ・エリセーエフに着目する予定でいたが、後者についてはすでにある程度の先行研究が存在し、その活動の輪郭は明らかになっているため、むしろこれまで殆ど等閑視されていながら、その実、日本文学受容に重要な役割を果たした人物に光を当てるのが望ましかろうと判断し、（ルネ・モーブランに加えて）アルフレッド・スムラーを取り上げることとした。

この二人の著述はまとまった形で刊行されていないものも多いため、まず、それを調査し、彼らの仕事の検討を通して両大戦間期におけるフランスにおける日本文学受容に対する理解を深化させることを目指した。

３．研究の方法

研究方法としては実証的な事実重視主義を旨とし、国内の図書館はもとより、フランスの研究機関をも活用しながら、関連資料（特にモーブランとスムラーの未発表論文など）の発掘に力を注いだ。なお、フランスの研究機関としては、特にフランス国立図書館とパリ第 7 大学図書館を利用した。

もっとも、本研究の目的は単なる書誌・目録造りにはなかった。上の「研究開始当初の背景」でも述べたように、「フランスにおける日本文学受容」の研究は徐々に活発になってきており、書誌的研究としてはすでに Patrick Beillevaire, Le Japon en langue française. Ouvrages et articles publiés de 1850 à 1945, Editions Kimé, 1993 などが存在する。

こうした先行研究が残した穴を埋めるに留まることは本研究の目指すところではなく、モーブランやスムラーなどの仕事が、日本文学をめぐる当時のフランスの文学的・学問的状況にどうのように反応し、どのように働きかけたのか―つまり、彼らの仕事が、それを取り巻く状況とどのような受動的・能動的な関係を結んだのかを浮き彫りにすることを目指した。
そのために、フランスの同時代の新聞（フォガロ紙など）や文芸雑誌（『フランス・ジャポン』誌、『白い羊』誌など）を幅広く調査した。

４．研究成果

『フランス・ジャポン』誌の主要メンバーの一人でもあったアルフレッド・スムラーの仕事を精査することによって、フランスにおける日本近代文学受容の歴史の重要な一面が浮かび上がってきた。
特に戦争を主題にした日本の同時代文学（火野葦平の作品など）がフランスでどのような反響を呼んだか、という問題を解明するための一つの糸口をつかむことができた。スムラーが対独レジスタンス活動に参加し、アウシュビッツなどの強制収容所に収監された経歴を持つことと、彼の日本文学観との関わりに着目することで、フランスにおける日本文学受容と政治的・社会的・軍事的背景との結びつきにも光を当てることができた。
また、日本近代文学のフランス移入に介在するファクターとして、日本文学の英語訳にも着目した。具体的には、火野葦平作品の英訳に携わったルイス・ブッシュの仕事を検討した。
さらに、ルイス・ブッシュの英訳刊行を契機に火野葦平『土と兵隊』がフランスを代表する新聞の一つ『フィガロ』紙の 1940 年 3 月 6 日号の第 3 面と第 4 面に紹介されていたことが明らかになった。これにより、日本の戦争文学に対するフランスのメディアの反応の一例を分析する機会を得た。
一方、両次大戦間の代表的なフランス俳人の一人であるルネ・モーブランについて調査を進めることで、フランスにおける日本の伝統的詩歌の受容の歴史の重要な一面が浮かび上がってきた。
特にフランスのリヨンで刊行されていた文芸雑誌『白い羊 Le Mouton blanc』にモーブランが関わっていたという事実の発見を端緒に、第一次大戦後のフランスにおける俳句の普及と、「モダンな古典主義」という文学的潮流との接点が明らかになった。
文学研究者のジャン・イティエが 1922 年に刊行した『白い羊』は、ジャン・モーラス流の擬古典主義とは一線を画しつつ「モダンな古典主義」の確立をめざしたもので、ジュール・ロマンの主張を引き継ぎ、ルネ・モーブランらを寄稿者に擁する雑誌だった。詩法に関する「モダンな古典主義」の狙いは、19 世紀後半の象徴主義が出来させた「（詩法上の）無政府主義状態」に終止符を打ち、秩序を回復することだったが、ただし、それが旧来の押韻や韻律のルールに無批判に従うことであってはならないという認識を持っていた。このとき一つのモデルとして浮上したのが俳句だったのであり、また、「モダンな古典主義」のモデルとされることによって、フランス語俳句の韻律に関する議論も深められることになった。
以上の成果は比較文学研究のみならず、日本文学研究、フランス文学研究、翻訳学、異文化コミュニケーション論など周辺の学問領域にも波及効果を持ち得るものと考えられる。
今後の展望としては、さらに多くのジャポニザンについて調査・分析を進めること（例えばアルベール・メーボンやスタイニルベル・オーベルランなど）、対象とする時期を広げること、ジャポニザンと日本人文学者との連携（例えば坪内逍遥作品のフランスへの紹介における吉江喬松とフランス側関係者との連携など）に光を当てること、等が考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 渋谷豊「白い羊と俳句―フランスにおける日本文学受容の一側面」『信州大学人文科学論集』第 5 号（通巻 52 号）、p. 133-144、2018 年、査読あり（単著）。
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19683&item_no=1&page_id=13&block_id=45

② 渋谷豊「フランスにおける日本文学受容の一側面――火野葦平の場合」『信州大学人文科学論集』第 4 号（通巻 51 号）、p. 141-153、 2017 年、査読あり（単著）。
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=18868&item_no=1&page_id=13&block_id=45

〔学会発表〕（計１件）
① 渋谷豊「両大戦間期のフランスにおける日本近代文学―『フランス・ジャポン』誌（1934

～1940）を中心に」　（「基盤研究（C）：両大戦間期フランスにおけるジャポニザンの活動」および「基盤研究（C）：昭和 10 年代における文学の＜世界化＞をめぐる総合的研究」による共催研究会『戦時下におけるメディアと対外戦略』2016 年 9 月 6 日、於東洋大学・白山キャンパス）（単独）。

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。